

JICA 訪問議事録

J I C A 兵庫センター訪問



日時：2011年9月6日（火）
10:00～13:00

場所：J I C A 兵庫センター

講師：山田麻紀さん

青年海外協力隊としてモルディブで体育を教えた。現在はJ I C A 兵庫センターのコーディネーターとして、主に開発教育に携わっている。

「J I C A の活動紹介」と「青年海外協力隊の体験」の2つの部門に分けて、お話していただきました。

A) J I C A の活動紹介

世界の現状

世界人口の80%に当たる55億人が途上国に住んでいる。

世界の5人に1人が一日1.25ドル以下で暮らしている。特に、サハラ以南の地域では約半数の人々が一日1.25ドル以下で暮らしている。

一日2200Kcal以下しか摂取していない栄養不足人口は、世界で8億4800万人にのぼるとFAOが発表している。

J I C A の活動紹介

J I C A は、貧困とは人間らしい生活を送る可能性を否定されることと定義している。

国際協力をする理由は、人道的立場から困っている人々に救いの手を差し伸べたいと考えるからだ。そして、発展途上国と先進国が力を合わせて取り組まなければならない課題があるからだ。

J I C A は政府開発援助（ODA）のうち、国際機関への資金の拠出を除く、二国間援助の実施を一元的に担っている。J I C A が行う二国間援助には、①技術協力②有償資金協力③無償資金協力がある。例えば、川沿いにお腹を空かせた子どもがいたとして、彼に釣りの方法を教えるとしたら①に当たり、彼にお金を貸すとしたら②、彼に魚をあげるとし

たら③の方法で援助することになる。援助する相手の状況によって、一番良い方法を選ぶ必要がある。

JICAは海外技術研修員を受け入れたり、阪神・淡路大震災の経験と教訓を世界に発信したりしている。

JICAは17カ所の国内機関を設置している。

山田さんが国際協力の道に進んだ理由

山田さんはホテルで8年間勤務していたが、「このまま一生この仕事を続けるのか？」と悩み続けていた。そんな時に、大きな書店で自分の興味のある本を何でも手に取ってみようと考えた。そこで出会った本が「世界がもし100人の村だったら」だった。その本を読んで、大学卒業率は世界で2%と知った。山田さんは大学を卒業するのは当たり前のことだと思っていたが、世界ではそれが当たり前ではないと気づき、国際協力の道に進もうと考えたそうだ。

B) 山田さんの青年海外協力隊での体験

青年海外協力隊として2年間、モルディブで体育の授業をした。

現地の人々と同じ物を食べ、同じ言葉を話して、現地の人々と同じ立場に立つことで、現地の人々がおかしいと思うことは指摘してもらえそうな環境作りに力を入れた。山田さんの活動が上の立場からの押し付けにならないように気を付けた。

<アイスブレイク>

- あなたの強みは何ですか？（一人ずつ発表。）
- モルディブのイメージ…観光パンフレットにあるような美しいリゾート地
- そのようなモルディブに国際協力は必要だと思いますか？

モルディブの紹介

1,200の島から成り立っている。（日本は6,852の島から成り立っている。）モルディブの島は小さいため、それぞれの島の役割が決まっている。例えば、空港の島には空港しかない。山田さんが活動したエイダフジ島は、高校がある7つの島の内の一つだったので、他の島から来た子ども達が下宿していた。島民2700人のうち1000人が子どもで、子どもの多い島だった。

カツオの消費量が世界一で、山田さんも毎日カツオを食べていたそうだ。

海拔の低さが世界一で、海面上昇のために2100年までに沈んでしまうとされている。

首都はマーレで、人口密度が世界一だ。（人口密度は東京の3倍。）人口が首都に集中して

いるのは、仕事や教育、医療を求めて人々が集まって来るからだ。つまり、都市と地方の格差が大きい。人口が増えたため、マーレでは、後から上に階を増やした危険なビルが目立つ。また、道が狭いため、サイドミラーを畳んだまま走っている車が多い。

山田さんはモルディブの情報を日本と比較しながら説明して下さり、国際協力の仕事を通して、日本もよく知ることができると強調されていた。

山田さんが行った体育の授業

モルディブの政府は情操教育に力を入れようと、国の政策として体育を奨励している。

山田さんは体操やスポーツの仕方をわかりやすく絵に描いて壁に貼り、山田さんが帰った後でも、現地の先生達が続けられるようにした。ポスターには、現地語と英語の両方が書かれていたが、モルディブでは自国で作った教科書がなく、オーストラリアから教科書を輸入する上、インドの先生が多いため、英語で授業が行われている。

山田さんは、白線の代わりに色の違う砂を使って砂の上に線を引いたり、平均台の代わりに道路の低い塀を使ったりして、現地にある物を工夫して体育の授業を行った。現地の先生からは「日本はお金があるから、道具を買ってよ。」と言われたそうだが、山田さんはそこで日本が道具を買ったとしても、継続性がないと考え、学校で予算を貯めて買うように促した。するとその後、学校は予算を工面して、平均台を購入した。

ダンスの発表会の際、学年主任の先生に「背が低い女の子とぼっちゃりした女の子の2人は、発表会に出してはいけない。」と言われた。なぜなら、モルディブの人々は見た目の美しさを最重視するからだ。モルディブの人々はダンスの完成度よりも衣装の美しさにこだわった。山田さんはその考え方には納得できず、二人の女の子を発表会に参加させた。

教師の育成

山田さんのもう一つの仕事は、体育をする教師を育成することだった。現地の先生達は体育の授業を受けた経験がなく、体育のイメージを持っていない。その上、先生達は若く、自分の仕事が増えることを嫌がり、なかなか協力してくれなかった。そこで、山田さんは先生達への講座で渡すレジメ一枚一枚に一人一人の名前を書いておき、必ずレジメを持って帰ってもらうようにしたり、文章中の大事な箇所はカッコ抜きにして、先生達が集中して山田さんの話を聞くように考えたりしたりした。また、講座に毎回参加した先生には、学校長のサインが入った終了証書を渡すようにしたこと、だんだん先生達も山田さんに協力してくれるようになった。このような工夫のかがあって、最終的には8人の先生が終了証書を手にした。

モルディブで学んだ事

モルディブは100%イスラム教の国なので、露出を避けるために、白いTシャツやサイズの小さめのTシャツを着ないように注意された。その時山田さんは、私らしさも大切だけど、モルディブの人々の文化や宗教、考え方、感じ方を大切にしなければならないと感じたそうだ。

山田さんは「アーデ」という言葉に救われたと言う。「アーデ」とは、モルディブの言葉で「おいで」という意味で、山田さんは知らない人々にもそのように声をかけてもらい、お世話になったそうだ。「アーデ」と家に呼ばれ、食事を作るのを手伝ったりする中で、山田さんは現地の言葉や価値観を学んでいった。山田さんは、コミュニティの大切さを感じたそうだ。

東日本大震災の際、モルディブのテレビ局は36時間テレビを行い、日本のための義捐金を募った。すると、モルディブは後開発途上国で貧しいにもかかわらず、5千万円の義捐金と、ツナ缶69万食が集まった。日本がかつて無償資金協力でモルディブに防波堤を作り、そのおかげで津波の被害を免れたことを、モルディブの人々は知っていたのだ。

メッセージ

外国の問題は日本には関係ないだろうか？日本はモルディブの経済水域を通して、アフリカから資源を輸入しているし、食糧を外国からの輸入に頼っている。

『愛』の反対は憎しみではなく『無関心』 マザー・テレサの言葉

C) 質疑応答

★言語はどのように学んだか？

- ・モルディブで話されているディベヒ語の先生がいなかったため、青年海外協力隊の事前研修では英語を学んだ。現地に行ってからディベヒ語を学び、80%はディベヒ語を話していた。

★青年海外協力隊では大学で専攻した分野で活動するのか？

- ・私の場合は、体育教師の免許を持っていて3年の実務経験があったので、それを活かせる応募先を選んだ。資格を持っていない一般の大学生でも、エイズ・感染症対策や村落開発の分野で応募することが可能だ。

★青年海外協力隊から帰った後、就職先を見つけるのは難しいか？

- ・難しい。帰国後に、青年海外協力隊での経験をいかに整理し、自分の強みとして次の仕事につなげるかが重要。青年海外協力隊で途上国に行く2年間は、様々な事を感じ取る感性が必要。

★現地の人々とモチベーションの差があったか？

- ・体育を奨励する学校長や私と先生達の間には意識の差があった。
- ・モルディブの海などの美しさは、日本が失った物だから綺麗に感じるとわかった。日本発展する中で失った物を伝え、モルディブが発展する上での選択肢を増やしたと考えている。知っている事は全て発信しながらも、押し付けにならないように気を付けた。

★JICA兵庫センターでのコーディネーターの仕事とは？

- ・主に、今回の講演のような開発教育を行っている。青年海外協力隊で学んだ事を伝え、聞いた人が途上国を日本とつなげて考え、行動してくれることを望んでいる。気付きの機会を提供する仕事だ。

展示室見学



コンゴ共和国に住むマウンテンゴリラの絶滅の危機は日本人にも関係している。携帯電話の原料を得るために、紛争が起こり、森林が減少したり、ゴリラが食糧になったりすることで、ゴリラの個体数が減っているからだ。現在では、紛争で得た原料は使ってはいけないことになっている。また、携帯電話はリサイクルできる。

資料室見学

- ・国別のプロジェクト資料やJICA職員が発行した本、世界の現状を伝える絵本などが置いてある。
- ・学校の先生には貸出可能で、一般の人は閲覧のみ可能。

食堂で昼食

- ・毎月違うエスニック料理が食べられる。
- ・今月はグアテマラ料理。



文責：江村望

感想

自分が経験した事を後でいかに整理してアウトプットするかが、経験を活かすか殺すかを決めると実感しました。山田さんは、自らが青年海外協力隊で経験した事をよく振り返って、物語を繋げ、得た事をまとめていらっしゃいました。私も一つ一つの活動をただこなすだけでなく、その後の振り返りを大切にしようと思いました。JICA兵庫の一階には展示室や資料室があり、一般の人にもオープンなスペースとなっていました。食堂の月替わりエスニック料理も一般の人でも食べることができ、イメージよりも開かれた場所でした。

江村望

以前から青年海外協力隊に興味があったので、少人数の環境で生の声を聞いてよかったです。プログラム体制は素晴らしいですが、その先の将来につなげることが難しいというのが、このプログラム全体、またそれを動かしているJICAの大きな問題でもあると思います。実際、山田さんも今はコーディネーターとして活躍されていますが、その先は分からないと言ってらっしゃったのが不安にも思いました。今回は、展示室や食事も含めとても有意義な時間を過ごさせていただきました。青年海外協力隊員として、また戻って来られること楽しみにしています。

内海美瑠